

県立考古博物館（仮称）基本構想

平成15年3月

兵庫県教育委員会

目次

構想の背景	1
-------	---

1 遺跡の宝庫、兵庫県	
2 考古学への関心の高まり	
3 地域文化の見直し	
4 検討の経緯	
5 基本構想の策定	

県立考古博物館（仮称）構想の基本理念	3
--------------------	---

1 県立考古博物館（仮称）構想の基本理念	
2 県立考古博物館（仮称）の整備方針	

県立考古博物館（仮称）の役割	5
----------------	---

考古博物館（仮称）の事業	6
--------------	---

1 体感できる博物館	
2 学べる博物館	
3 フィールドへと誘う博物館	
4 探究する博物館	

施設構成	15
------	----

1 展示部門	
2 体験部門	
3 学習支援部門	
4 調査研究部門	
5 収蔵部門	
6 アミューズメント部門	

管理運営	18
------	----

県立考古博物館基本構想策定の経過	19
県立考古博物館基本構想策定委員会名簿	19

構想の背景

1 遺跡の宝庫、兵庫県

兵庫県は多様な地域文化を育んできた旧五カ国（播磨、摂津、丹波、但馬、淡路）をあわせて成立し、県内にはそれを裏づける優れた歴史文化遺産が豊富に存在する。とりわけ先人が残した遺跡の数は二万五千を超え全国でも有数の数を誇り、出土した考古資料は膨大な数にのぼる。これらの考古資料は先人の知恵や経験を現代に伝えるものとして、各地域の歴史や文化を正しく理解する上で欠くことのできないものであり、将来の県民文化の向上・発展の基礎となる貴重な財産である。

2 考古学への関心の高まり

近年、兵庫県においては、明石海峡大橋関連事業などの大規模プロジェクトや、阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴い多くの発掘調査が行われている。その結果、古代船団を描いた絵画木製品が出土した出石町・袴狭遺跡、全国有数の規模を誇る旧石器時代集落である春日町・七日市遺跡など重要な発見が相次ぎ、県民の考古学に対する関心が高まるとともに、これら貴重な考古資料の公開・展示を望む声が高まってきている。

3 地域文化の見直し

政治・経済のグローバル化とともに、世界的視点から自らのアイデンティティの拠り所である身近な地域文化を見直す動きが活発化している。また経済的な停滞の中、地域活性化の資源として地域文化の表象である歴史文化遺産を活用する試みが盛んになってきている。考古学によって発見された遺跡や遺物は祖先の生きた証であり、地域のシンボルとして新しい地域文化創造の源となることが期待されている。

4 検討の経緯

平成 5 年 12 月に兵庫県文化財保護審議会から、発掘調査成果の公開・展示を積極的に進める必要があるとの中間報告（「こころ豊かなふるさと「兵庫」づくりの推進 - 文化財保護の当面の課題 - 」）があった。この報告を受け、有識者からの意見聴取および先進事例調査等をへて、平成 11 年度から「県立考古博物館(仮称)基本構想検討委員会」を設置し、遺跡や遺物等を活用した博物館施設を通じて、「こころ豊かな人づくり」を実現するための検

討を行ってきた。

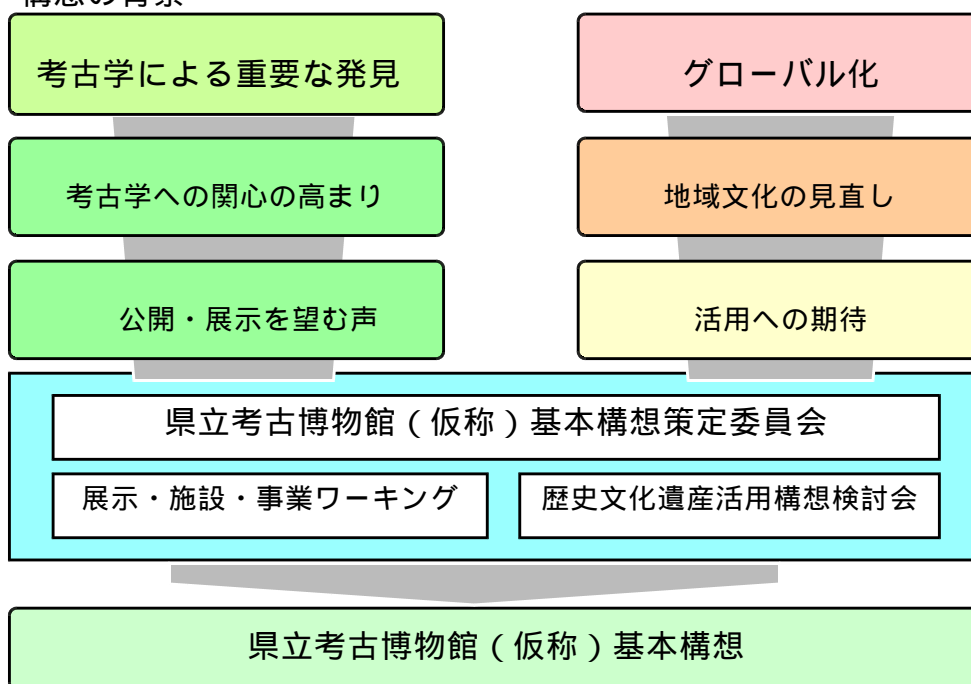
平成 12 年 10 月、兵庫県文化財保護審議会から『次世代への継承と新しい文化の創造のために 21 世紀における兵庫県の文化財行政について』が建議され、この中で文化財を次世代に引き継いでいくという視点を踏まえながら、埋蔵文化財の積極的な活用を図るための拠点として考古博物館の早期整備の必要性が説かれた。

基本構想検討委員会では平成 13 年度まで検討を行い、県民から求められる博物館像が従来の公開・展示重視型から、生涯学習・学校教育へ貢献するソフト事業重視型に変化していることを踏まえ、新しい博物館は県立史跡公園である「播磨大中国古代の村」(加古郡播磨町大中)と一体に整備し、考古資料を活用して県民に歴史学習の場を提供する体験型の施設とするのが望ましいとの基本的考えに至った。

5 基本構想の策定

以上のような経緯をへて、平成 14 年度は「県立考古博物館(仮称)基本構想策定委員会」を設置するとともに、展示・施設・事業の内容について検討をおこなうワーキングを開催し、基本構想の策定を進めた。また同時に文化財全体を活用する新たな枠組みを検討する「歴史文化遺産活用構想検討会」を開催し、基本構想にその検討結果を反映させている。

図 1 構想の背景

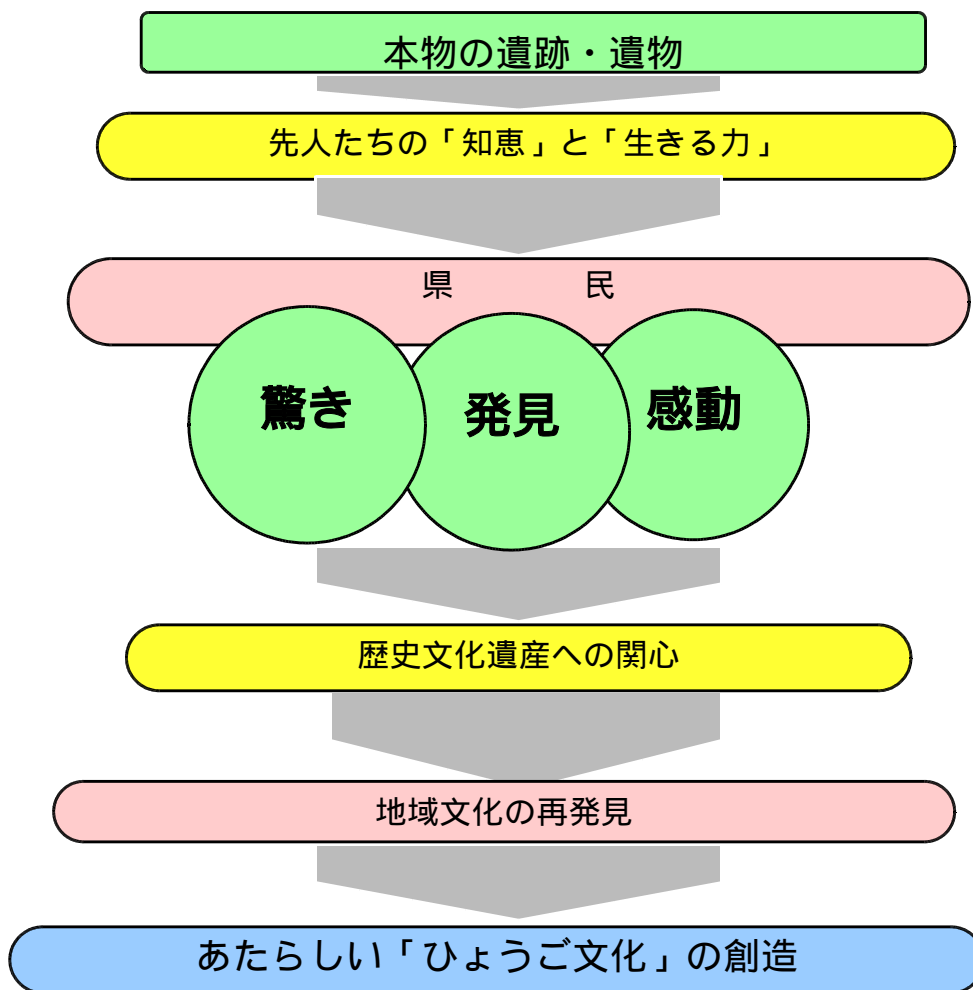


県立考古博物館（仮称）構想の基本理念

1 県立考古博物館（仮称）構想の基本理念

考古博物館（仮称）は、県民が本物の遺跡・遺物にふれることによって得た、先人たちの「知恵」と「生きる力」への「驚き・発見・感動」を身近な歴史文化遺産への関心へと結びつけ、地域文化を再発見するきっかけをつくり、21世紀におけるあらたな「ひょうご文化」の創造に寄与することを基本理念とする。

図2 考古博物館（仮称）の基本理念



2 県立考古博物館（仮称）の整備方針

（１）事業活動の方針

県立考古博物館（仮称）は、県民との協働により考古学の手法で地域文化を探究し、その成果を双方向的な展示事業・体験事業・学習支援事業を通じて県民と共有し、地域文化再発見のきっかけづくりを行う施設である。

先人たちの知恵と生命力にあふれた生活を現代に伝えるために、展示に「体感」を重視したハンズ・オンの手法を取り入れ、体験学習を博物館活動の軸に据えた、従来の博物館の概念を超える21世紀にふさわしい新しいスタイルの県民参加型博物館を目指す。

（２）施設整備の方針

施設は緑豊かな県立史跡公園「播磨大中国古代の村」（加古郡播磨町大中）の隣接地に、周辺環境との調和・自然との共生に配慮しながら、調査研究機能の充実を図るため埋蔵文化財調査事務所と一体に整備する。

また多様な地域文化に恵まれた兵庫県の特性を考慮し、地域文化探究の拠点として市町の資料館とも連携を図るほか、分館の整備を図ることも視野に入れ、県下全域をフィールドとして活動する博物館として整備する。

県立考古博物館（仮称）の役割

1 「見る・やる・感じる」 - 体感できる博物館 -

「驚き・発見・感動」をコンセプトに、考古学が明らかにしてきた地域文化を素材として双方向的な展示・体験学習を実施し、地域文化を体感できる場としての役割を担う。

2 「学ぶ・考える」 - 学べる博物館 -

生涯学習・学校教育との連携により、展示・体験で得られた経験をさらに深め、地域文化への理解と関心を高めるための学習活動を支援し、地域文化の保護活用を担う人材を育成する役割を担う。

3 「行く・見つける」 - フィールドへと誘う博物館 -

本施設を県立史跡公園「播磨大中国古代の村」の隣接地に整備するとともに、兵庫県内の史跡公園や考古資料を収蔵展示する資料館等を博物館のサテライトと位置づけネットワーク化することにより、博物館を遺跡・遺物が埋蔵されるフィールドへ直結させ、来館した人々を地域文化に満ちあふれるフィールドへと誘う役割を担う。

主なサテライトとしては、田能遺跡（尼崎市）、会下山遺跡（芦屋市）、五色塚古墳（神戸市）、玉丘古墳群（加西市）、赤穂城跡（赤穂市）、新宮宮内遺跡（新宮町）、箕谷古墳群（八鹿町）、茶すり山古墳（和田山町）、篠山城跡（篠山市）、三ツ塚廃寺跡（市島町）、七日市遺跡（春日町）、淡路国分寺跡（三原町）などの史跡公園等がある。

4 「調べる・創る」 - 探究する博物館 -

祖先が残した貴重な歴史文化遺産である遺跡・遺物等を素材に、県民の参画と協働による最先端の調査・研究をおこない、兵庫県における地域文化の成り立ちを探究するとともに、新たな地域文化を創造する役割を担う。

考古博物館（仮称）の事業

1 体感できる博物館

（１）展示

来館者が祖先の歩みについて考えるきっかけをつくるために、考古学が解き明かした兵庫県の地域文化の特色を、「驚き・発見・感動」をコンセプトに県所蔵考古資料を中心とした本物の遺物によってわかりやすく展示する。

展示は屋内の常設展示と企画展示、屋外の展示によって構成し、常設展示はガイダンス展示とテーマ展示の二部構成とする。ハンズ・オンの手法を取り入れることにより、見るだけでなく触覚や聴覚など五感で感じられる「体感」できるものとし、また常設展よりも企画展に重点を置いた構成として常に内容に変化をもたせる。

ガイダンス展示（常設展）

エントランスホールと連続した開放的な展示室で、考古学に対する興味を高め理解を深めるため、基礎的な情報を提供する展示を行う。

【考古学入門】

考古学の基本的な方法論（層位学・型式学・分布論）や発掘調査の手法等を、実物資料を使ってわかりやすく展示する。

【ひょうごの遺跡】

来館者が身近な考古資料に出会えるように、国県指定史跡を中心に県下全市町から各1遺跡以上を選定し、写真・遺物・解説をコンパクトにまとめて展示する。

【兵庫の至宝】

指定文化財等の兵庫県を代表する考古資料を、ディスプレイ・ライティングに工夫を凝らした「魅せる」手法で展示する。

テーマ展示（常設展）

各時代の兵庫県における地域文化の特色を象徴するテーマを設定して、テーマにふさわしい遺跡の調査成果の全容をハンズ・オンの手法を取り入れた斬新な構成で展示する。展示は毎年1ブース以上を新たな遺跡に更新し、変化をもたせる。

表1 テーマ展示候補

時代	テーマ	タイトル	地域	遺跡
旧石器時代	道具	ナウマン象を追って	丹波	春日町・七日市遺跡
縄文時代	交易	海渡る山海の珍味	淡路	東浦町・佃遺跡
弥生時代	環境	自然と共生する村	東播磨	神戸市・玉津田中遺跡
古墳時代	王権	蘇る但馬王	但馬	和田山町・茶すり山古墳
古代	交通	山陽道の「道の駅」	西播磨	龍野市・小犬丸遺跡
中世	生産	播磨特産「須恵器」	東播磨	明石市・魚住古窯址群
近世	都市	酒蔵のまち	摂津	伊丹市・伊丹郷町遺跡

企画展示

常設展示の内容をさらに深め、「考古学による歴史の謎解き」をコンセプトに、兵庫県の地域文化を国際的・学際的な視野から見つめ直し、わかりやすく親しみやすい内容で展示する。

【特別企画展】

春秋の年2回、常設展示をさらに掘り下げる内容で、「考古学による歴史の謎解き」をテーマとした展示を企画する。春季は子供、秋季は大人を対象とし、それぞれの年齢層に合った内容で展示を行う。

【ミニ企画展】

最新調査成果の「速報展」や県民が自ら企画する「県民企画展」、季節性をもたせた展示などを随時行う。

屋外展示

県立史跡公園「播磨大中国古代の村」そのものを博物館の展示物として位置づけ、弥生時代集落のイメージを高める修景を行う。竪穴住居等の復元による「遺構展示」、植生等の「環境展示」、生活を再現する「生活展示」などにより、古代空間を創出する。

【遺構展示】

竪穴住居・掘立柱建物など弥生時代集落を構成する遺構を、最新の研究成果に基づき復元する。

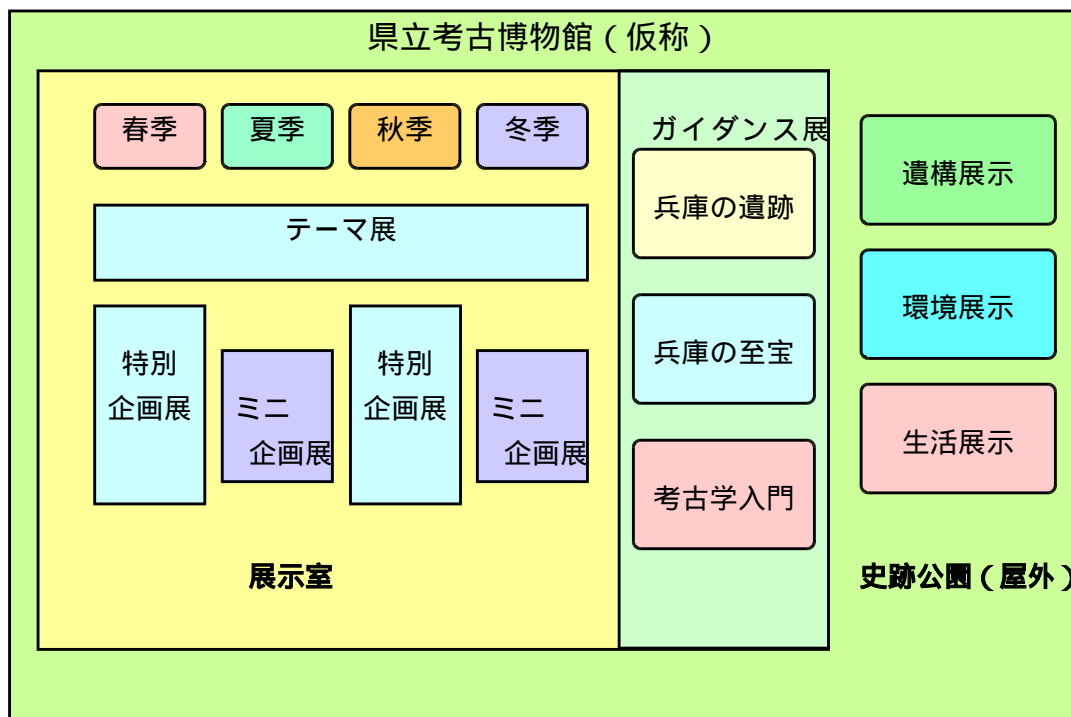
【環境展示】

古環境研究によって得られたデータをもとに、弥生時代の植生・地形・景観等の復元を行う。

【生活展示】

復元された遺構・環境を利用して、スタッフ・ボランティアが弥生時代の生活を再現する。

図3 展示のイメージ



(2) 体験

来館者が展示によって得た驚き・感動・疑問を体験的に深め、さらに新たな学習の契機とするために、古代技術を実際に体験してみる「古代体験」や、発掘調査などの考古学調査・研究を体験する「考古学体験」など、あらゆる年齢層のニーズに応える様々な体験メニューを開発し、常時体験が可能なように用意する。

古代体験

石器づくりや土器づくりなど数時間で手軽にできる簡易な体験から、古代米づくりなど館外での長期間にわたる生活体験まで、古代技術の体験をワークショップ型式で実施する。

考古学体験

博物館が行う発掘調査や資料整理に参加して、調査等の体験ができるようにする。

2 学べる博物館

(1) 講座・講演会・シンポジウム

展示・体験を通して抱いた新たな疑問や問題意識をさらに深め、県民の自主的な学習活動を深めていくための事業として、考古学によって明らかにされた兵庫県地域文化を題材とした、各種講座・講演会・シンポジウムを実施する。またシンポジウム・展示・講座等の各種イベントを組み合わせた「総合文化財展」と「地域文化財展」を開催する。

講座・講演会・シンポジウム

【講座】

子供向けの入門講座から本格的な学術講座まで、県民の多様なニーズに合わせた講座を開催し、来館すればいつでも学べるようにする。

【講演会】

博物館のスタッフや第一線で活躍する考古学者による最新の研究成果の紹介や遺跡の調査報告などの学術講演会を実施する。

【シンポジウム】

企画展示のテーマに合わせた内容の公開シンポジウムを、県民参加によって開催する。

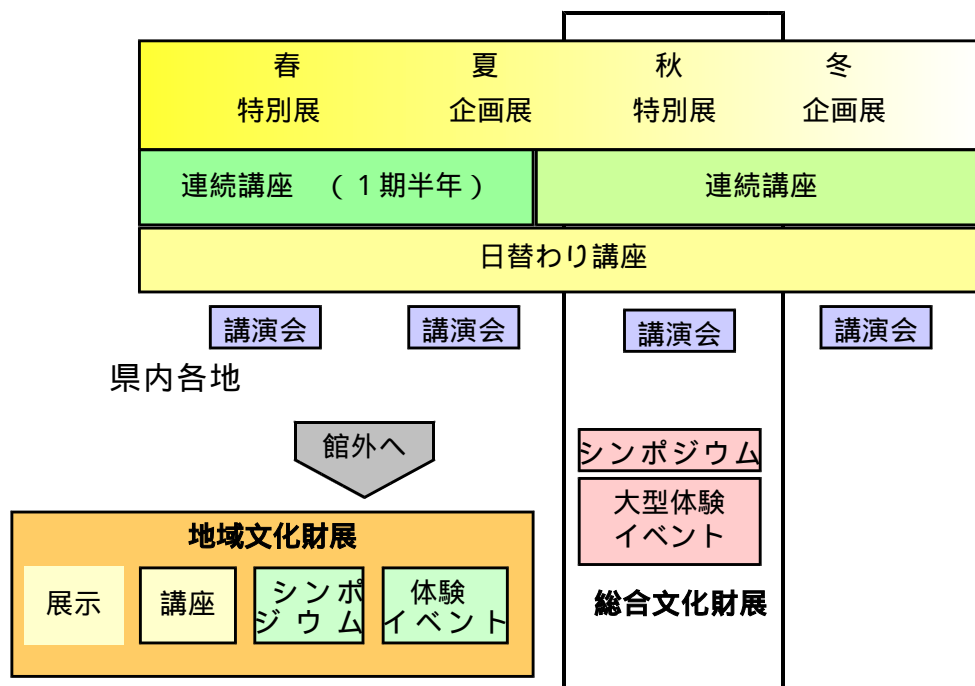
総合文化財展

博物館のメインイベントとして、秋期特別企画展の開催期間中に、シンポジウムを核に各種講座や体験イベントなどを組み合わせた「総合文化財展」を、地域住民をはじめとする県民の参画によって開催する。

地域文化財展

年1回、県内各市町と連携して、地域住民の参画と協働によって展示・シンポジウム・体験イベントを組み合わせたイベントを開催する。

図5 講座・講演・シンポジウムのイメージ



(2) 学習支援

博物館の展示・体験学習によって触発された、県民の自主的な学習意欲をさらに高めるため、博物館において学習支援のための事業を行うとともに、地域へ出向き考古資料を活用した事業を行う公民館や学校を支援する。

また地域文化の学習を趣味・教養の域に留めず、博物館の運営や企画に参画するボランティアや地域における歴史文化遺産保護活用のリーダーとして活躍できる人材を育成し、地域文化の再生に貢献する。

生涯学習の支援

館内に学習相談コーナーを設け常時考古学の学習相談に応じ資料提供等を行うほか、考古資料を活用した自主学習などの生涯学習に対し、講師の派遣や資料の貸し出しなどの支援を行う。また生涯学習の可能性を広げるため、学習成果を博物館ボランティアなど文化財活用の実践の場で活かせる「“考古楽者”養成講座」を実施する。

【“考古楽者”養成事業】

講座・実習・体験からなる講習によって、考古学の基礎的な知識を身につけた人材“考古楽者”を養成する。受講者はボランティアとして博物館事業に参画するほか、地域における考古学学習・歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍する。

【学習相談】

子供の自由研究の相談から、学術的内容の問い合わせまで対応できるように、学習相談コーナーにスタッフを常駐させ、来館・電話・メール等での相談に対応する。

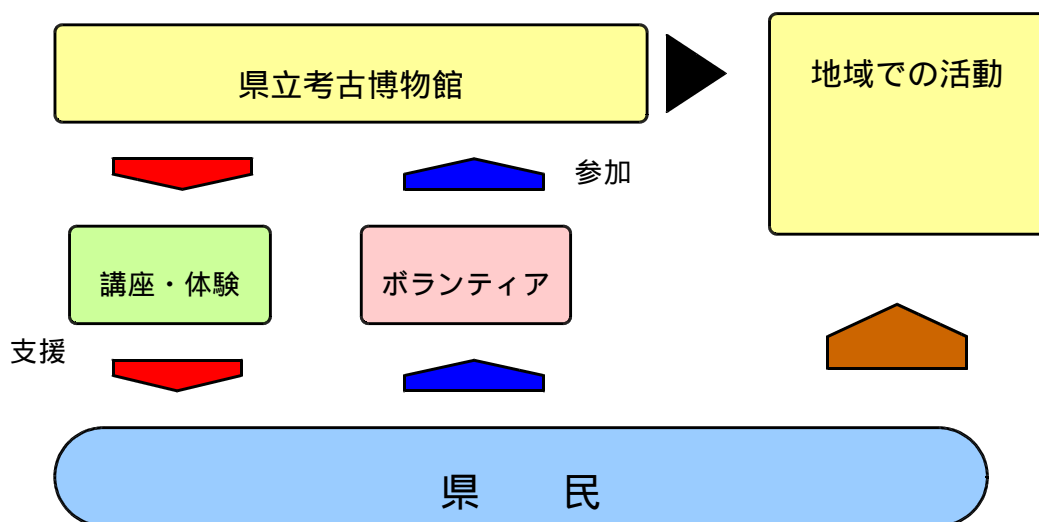
【地域への出張講座】

各地域単位の自主学習グループや、生涯学習施設に出向き、講座や体験学習の指導を行う。

【学習素材・資料の提供】

図書室の開放、資料の貸し出しなどを行う。

図6 生涯学習支援のイメージ



学校教育の支援

考古資料を活用した体験学習や歴史学習を「総合的な学習の時間」をはじめとする学校教育に導入できるように、教職員と連携して学習プログラムの開発を行い、資料の貸し出しや体験学習の指導などの支援を行う。また校外活動や「トライやる・ウィーク」等の学校行事を積極的に受け入れる。

【学習プログラム開発】

博物館スタッフと教員がワークショップ型式で考古資料を活用した学習プログラムを開発する。

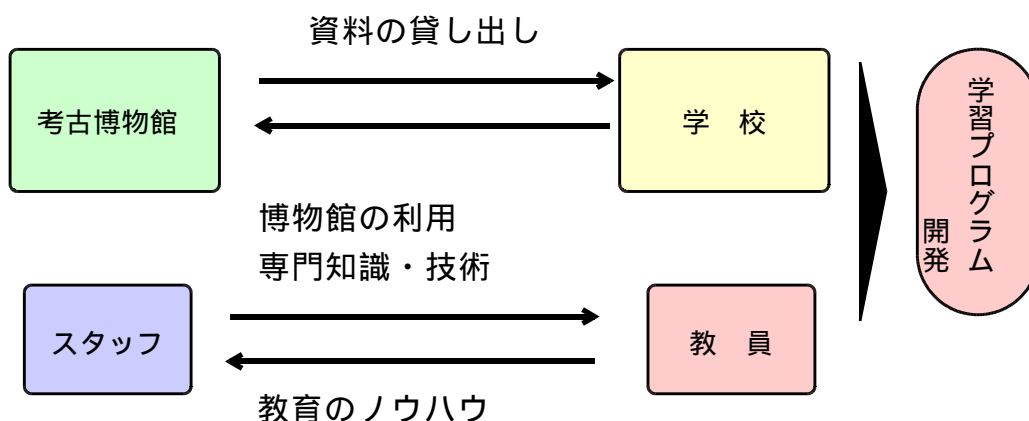
【出前授業】

博物館スタッフが学校に出向き、講義や体験学習の指導を行う。

【資料の貸し出し】

学校での授業に活用できるよう、各時代の実物やレプリカを組み合わせた「貸し出しセット」を作成し、学校への貸し出しを行う。

図7 学校教育支援のイメージ



3 フィールドへと誘う博物館

(1) 史跡公園・考古系資料館のネットワーク化

整備された史跡公園をはじめとする、県内に2万5千以上存在するすべての遺跡を博物館のサテライトとして位置付け、館外活動の拠点とする。また県内外各地の博物館・大学等と提携し、機能的に不足した部分を相互に補完するネットワークを構築する。

史跡公園ネットワーク

県内各地の史跡公園をネットワーク化し、博物館内に展示しきれない各地域の歴史的特性を県民に示すためのサテライトと位置づけ、史跡情報の提供や史跡ツアーなどを行う。

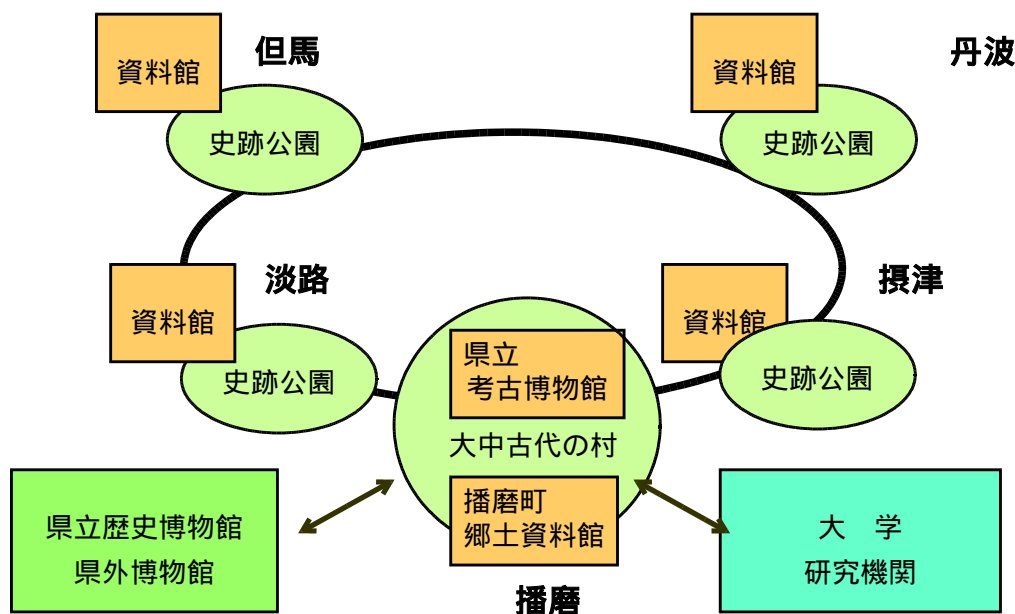
考古系資料館ネットワーク

考古資料を展示公開する博物館等をネットワーク化し、展示・ソフト事業等の企画の相互提供、共同事業の実施、資料の貸し借り、情報の共有を行う。

(2) 発掘現場との連携

県市町が実施する発掘調査の予定、現地説明会の案内などの情報を収集し県民に提供するとともに、発掘現場見学ツアーなどを行う。

図8 ネットワークのイメージ



4 探究する博物館

(1) 考古学の調査研究

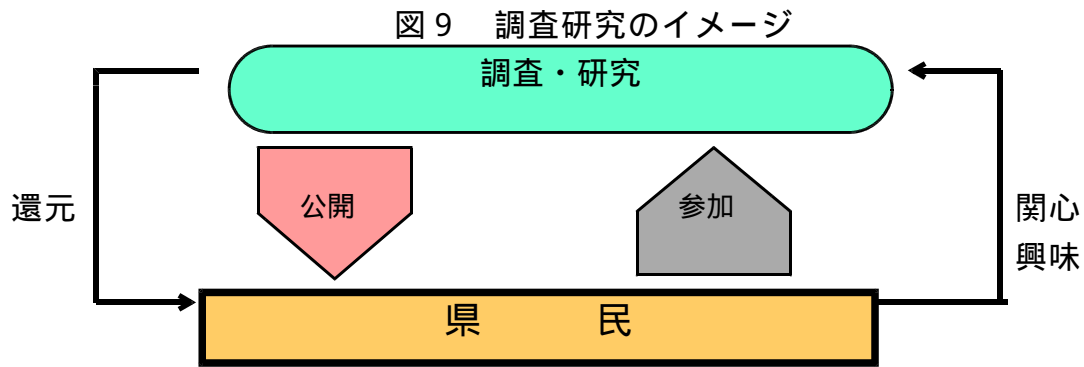
兵庫県における地域文化の成り立ちを解明し新たな地域像を創り出すことを目的として、考古学を中核とした学際的な調査研究体制を整え、市町や大学等と協力して、遺跡の発掘調査や測量調査、遺物の資料調査などの基礎調査や、調査成果に基づく地域文化の研究などを県民の参画と協働で行う。

地域文化探究のための調査

地域文化の成り立ちを解明するための発掘調査等を実施する。調査研究にあたっては、県民の参画と協働により行う。

学際的な協力体制

大学等との学際的な協力体制を整え、考古学だけでなく歴史学・地理学・建築学・人類学・民俗学・教育学等の専門家を館外スタッフとして調査研究を行う。



(2) 考古学の情報収集・発信

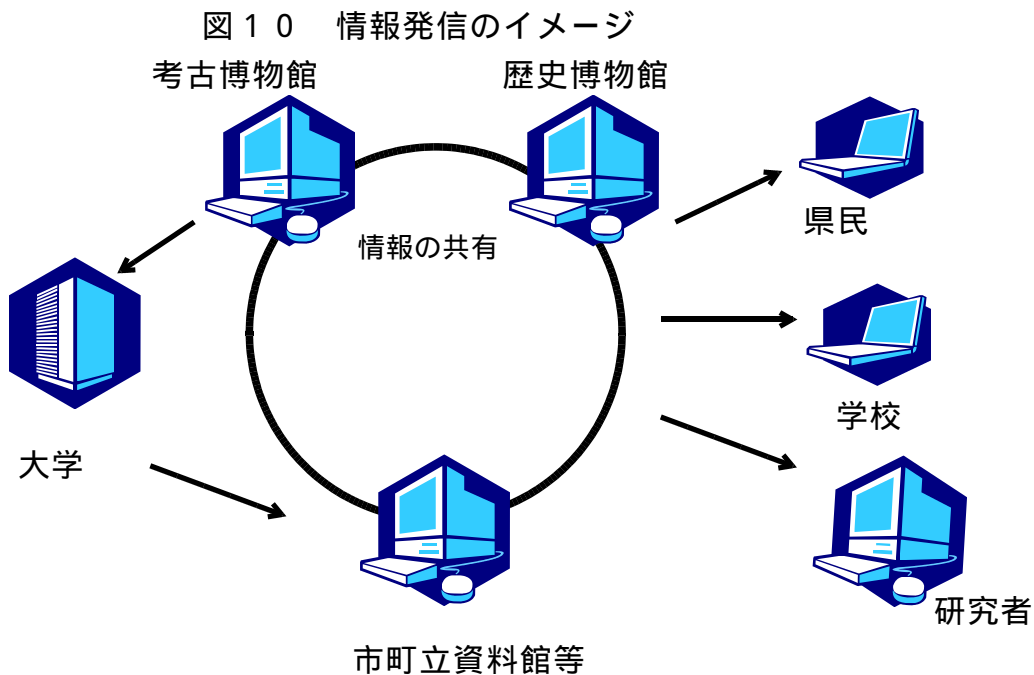
遺跡や出土遺物に関するあらゆる情報を収集し、誰もが検索・活用しやすい体制に整備した上で常時公開する。また大学等との連携により、オンラインでの検索が可能な情報ネットワークを構築して、兵庫県の考古学情報を世界に向けて発信する。

データベースの構築

県内に所在する遺跡・遺物等に関する情報を収集し、大学等と連携して整理・研究を行った上で、一般向け・専門家向けに加工を施し、広く県民に公開し、生涯学習・学校教育の素材としての活用を行う。

ホームページの公開

調査研究の成果や兵庫県の最新の考古学情報をホームページで公開し、全世界へ情報発信する。



施設構成

各事業を実施するために、博物館本体の整備と、博物館の一部となる大中古代の村の整備を行う。

1 展示部門

展示機能をもった開放的なエントランスと、常設展・特別展・企画展を同時に開催できる展示室および展示物等の製作を行う工房を設ける。

エントランス

博物館の入口としての機能とともに、ガイダンスエリアとしての役割を加え、導入的な展示を行う。このため壁面・床面に展示施設を埋め込み、内部にショーケースを配置する。

展示室

「常設展も変化する」ことを前提に、展示内容によってパーティションで自由に仕切れる大型の展示室とする。移動式の展示ケース・展示台の使用を基本とするが、国県指定文化財の公開展示にも堪えうるよう、温湿度調節可能な免震装置付き展示ケースも設置する。

展示工房

展示施設の製作、模造品等の展示物を製作する工作室を設置する。

屋外展示

大中古代の村を再整備し、竪穴住居などの遺構展示を充実する。

2 体験部門

体験学習室

あらゆる古代体験が可能な大型の体験学習室を設ける。周囲にはデッキを設け、外部の遺跡公園との自由な行き来を可能にする。

フィールド体験施設

大中古代の村に屋外で古代の暮らしを体験できる施設を設置する。

3 学習支援部門

学習室

小規模な講座やワークショップ等を行う場所である。これらの講座を開催しない時間には、自主学習の場として、来館者が自由に使用することができる。

学習相談コーナー

スタッフが常駐し、学習相談に応じる。

ボランティアズ・ルーム

博物館を通じ自主的な学習活動を実践するボランティアを支援するための場所である。ボランティアが集まり、自主的学習のための作業や休息ができる空間・環境を提供する。

研修シアター

シンポジウムや大規模な研修・会議に使用する施設である。博物館で開催する事業はすべてが参加型を旨としているため、従来の講堂のように「語る側」「演じる側」と「見る側」「聞く側」を対面型で配置するのではなく、舞台を円形に近い形に配置し、それを取り囲むような「劇場型」のシアターを整備する。

情報検索室

遺跡や出土遺物に関するあらゆる情報を集積し、誰もが検索・活用しやすい体制に整備したものを検索できる場として整備する。

図書室

図書情報を一括して管理する。県民が広く活用しやすいよう整備する。

4 調査研究部門

調査研究室（スタッフ・ルーム）

発掘調査後の資料調査・県内遺跡の各種情報整理のほか、遺跡・遺物に関する研究活動・遺跡・遺物活用法の研究・開発を行う。原則的に来館者に公開し、スタッフと自由に交流・情報交換することを可能にする。

6 収蔵部門

特別収蔵庫

国県指定考古資料等の重要遺物や金属器などの脆弱遺物を収蔵する、温湿度管理可能な収蔵庫を設置する。

7 アミューズメント部門

ミュージアム・ショップ

古代をイメージしたみやげものや、古代を体験できる教材、フィールド調査の機材を提供する。

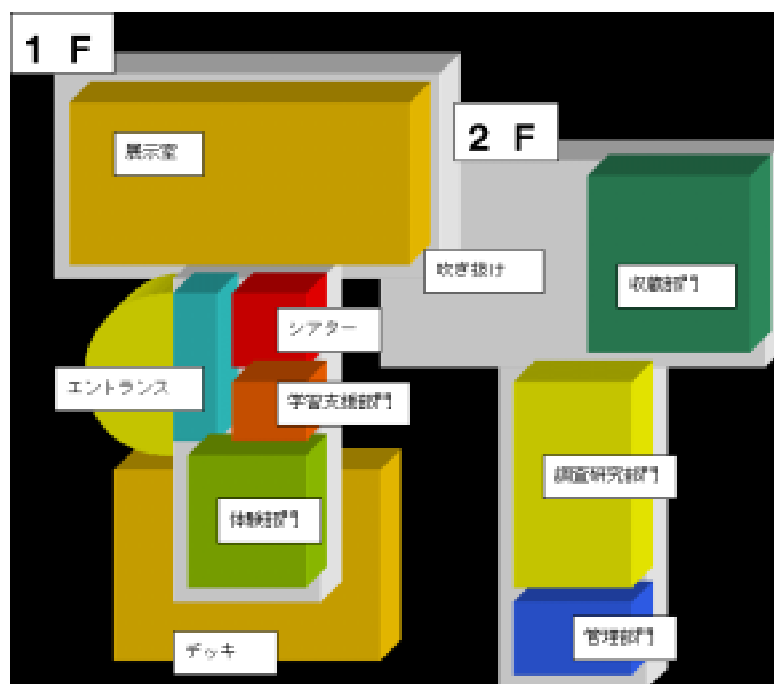
飲食施設（カフェ）

食を通じ、古代を体験することのできる場として安価で良質な食材を提供できる飲食施設を設置する。

5 管理部門

事務室

図 1 1 施設構成のイメージ



管理運営

埋蔵文化財調査事務所と一体的に整備することで管理運営の効率化を図るとともに、県立歴史博物館とも連携して県文化財保護審議会から提言のあった歴史文化遺産活用構想を推進し、あわせて独立行政法人化など運営形態のあり方についても検討する。

県立考古博物館（仮称）基本構想策定の経過

平成14年5月20日 第1回県立考古博物館（仮称）基本構想策定委員会
於：兵庫県民会館

9月27日 第2回県立考古博物館（仮称）基本構想策定委員会
於：兵庫県民会館

平成15年2月17日 第3回県立考古博物館（仮称）基本構想策定委員会
於：兵庫県職員会館

県立考古博物館（仮称）基本構想策定委員会名簿

会 長 石野 博信 徳島文理大学教授

副会長 岩田 一彦 兵庫教育大学教授

工樂 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力
事務所研修事業部長

佐伯 順子 同志社大学教授

佐伯 忠良 播磨町長

高瀬 要一 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
文化遺産研究部遺跡研究室長

玉岡かおる 作家

端 信行 兵庫県立歴史博物館館長・京都橘女子大学教授

村上 和子 サンテレビジョン放送運営センター参事